■　北海道で得たもの　■

その山容から、羊蹄山は蝦夷富士とも呼ばれる。この季節、残雪が縞模様を作り、殊に美しい。その羊蹄山を望み流れる尻別川を、ラフティングボートが列をなして下った。

修学旅行２日目のニセコは２８°の予報。ドライスーツで身をくるむと暑いくらいだったが、水が掛かるとその分気持ちがいい。川に飛び込めば、スーツ越しに雪解け水の混じる川の冷たさが全身を覆う。声を揃えてパドルで漕ぎ、近づくボートに水を浴びせ合う。各ボートから絶叫とはしゃぎ声が響き、気がつけば生徒だけでなく教員も童心に戻っていた。

北海道への旅だが、他校とは異なり、本校の修学旅行には国際交流も組み込まれている。今年度は、ルスツで北海道大の留学生と交流を持った。アイスブレイクが終われば、徐々に緊張がほぐれ、自然な会話に近づいていく。某ＴＶ番組の出川哲朗とまではいかなくとも、お互いに分かり合おうとする気持ちさえあれば、言葉の違いなど大した問題とはならないと思えてきた。

私もカルチャービンゴゲームに巻き込まれた。男子２名に“What is the motto of Hokkaido University?”と問われたので、思いつくまま“Boys, be ambitious!”と答えたものの、確信がなかった。慌てて言葉を添えようとしたら、“maybe”とすべきところを、口から「たぶん」と日本語が出てしまった。

集合時間は守られ、一度も出発時間が遅れることはなかった。食事やバスの中でのマナーもよかった。遺失物はあったが、旅行会社やホテルの方々のおかげで全て事なきを得た。そういう意味では、旅行に関わった皆で作り上げたよい旅だった。

最後の夕食後、３人の生徒がマイクを手に司会を始めた。旅行中に誕生日を迎えた生徒と先生にバースデーサプライズ。音楽が流れ、照明が消され、紹介された６人がケーキの蝋燭の火を吹き消した。歓声が上がり、拍手が起こる。その瞬間、会場がひとつになった。集団には集団としてのカラーができる。このとき、第２学年が仲のよい大家族のように、私には見えた。

いつの日か再び北海道を訪れて、あの羊蹄山に登ろうと思う。志とまではいかないが、私にも小さな目標ができた。その時、生徒たちはいくつになっているだろう。この修学旅行で蒔かれた種は、一人ひとりの人生で花を咲かせているだろうか。誰かの人生で大志という実を結んでいるだろうか。